

センの自由概念について

—バーリンとの比較—

上 森 亮

序

1958年にアイザイア・バーリンが、「消極的自由」と「積極的自由」という「二つの自由概念」を提起して以来、この二つの自由の概念をめぐる実に多くの解釈が現れ、政治理論における「自由」の地位を高めたことは事実であるが、その一方でバーリンの分析が持っていた思想的豊かさや政治的意味は切り捨てられ、抽象的論理の世界で重箱の隅を突付くような議論が繰り返されるようになったことも、また事実である。

本論は、こうした状況において、「現実」との接点を常に大切にしつつ、バーリンの「二つの自由概念」の批判的検討を通して、独自の「自由」概念を構築した経済学者のアマルティア・センの自由概念について考察し、バーリン自身の自由概念との比較を行なうものである¹⁾。

1. センの消極的自由批判

しばしば、バーリンの擁護する「消極的自由」は、他者（政府なども含んだ）による干渉を最小限に抑えることを主張するリバタリアンの掲げる「自由」（この自由もしばしば消極的自由といわれる）を表しているように解釈されることもあるが²⁾、センによれば、バーリンの消極的自由は、リバタリアンのいう消極的自由とは区別される。このセンのバーリン解釈について見る前に、まずは、なぜセンにとってリバタリアンのいう消極的自由ではいけないのか、について見ていくことから始めよう。

センは、リバタリアンの代表としてロバート・ノージックの『アナーキー・国家・ユートピア』を取り上げ、ノージックのアプローチが、「最もエレガントで、力強く、影響力のあるアプローチの一つ」[Sen 1988, p. 274] であることは認めつつも、ノージックの議論の核となる「権原理論 (entitlement theory)」には明確に反対する。

センによれば、ノージックの掲げる、「制約に基づいた (constraint-based) 義務論的見

解では、権利は行為に対する制約として扱われる。これらの制約は、たとえこのような侵害がよりよい状態へと導く場合においてさえ侵害されてはならない。権利の侵害はただ単に誤っている」[Sen 1982, p. 5, 強調原文]となる。しかし、この議論は重大な点を見落としている。ノージックの議論においては、もちろん「積極的自由」は他者の権利侵害とみなされ、退けられるのは明らかであるが、それを脇に置くとしても消極的自由そのものの正当化においても問題がある。センはこのことを示すために、次のような架空の例をあげる。

舞台はロンドン。東アフリカからの移民で成功を収めている商店主であるアリ (Ali) は、地元の人種差別主義者の小さなグループに敵意を抱かれており、その中の一部の暴漢が、アリがある晩一人で行く人目につかない場所でアリに暴行を加えようとしている。この計画をいち早く知った、アリの友人で西インド人のドナ (Donna) は、アリに警告しようとしたが、アリは外出しており、一度も家に戻らずに暴行が計画されている場所まで行きそうである。ドナは、アリがどこへ出掛けているかも、また暴行が行なわれる場所も知らないが、アリと商売上の付き合いがあるチャールズ (Charles) の机に、どこへ出掛けるかについてのメッセージを残していることは知っている。しかし、またチャールズも出掛けており連絡が取れない。よって、アリのメッセージを手に入れるにはチャールズの部屋に侵入するしかない。警察に助けを借りようとしたが、偏執狂の妄想として退けられた。ドナは、チャールズの部屋に侵入すれば、確かにアリに対する暴行を阻止できることは知っている。しかし、また彼女は、チャールズが隠し立てをする男でプライバシーを侵害されることを好まず、個人的な書類を見られたら困惑することも知っている。実際、ドナは、自己中心的なエゴイストのチャールズが、アリが暴行されることよりも自身のプライバシーが侵害されることによって、より当惑するということを知っている。さて、ドナは何をすべきか？ [Sen 1982, pp. 7~8]

この例では、確かに、アリに暴行を加えないように、道徳的に課される「側面的制約 (side constraint)」は暴漢にはある。しかし、もちろんドナは暴漢ではない。それどころか、この見解では、チャールズの権利侵害 (この例ではドナが部屋に侵入すること) に対しても側面的制約が課される。よって、アリのより重要な権利 (暴行を受けないこと) の侵害を、より重要でないチャールズの権利を侵害することによる、帰結的な正当化のために用いることはできない。権利のトレード・オフを否定するノージックの議論では、この例の場合ドナは何もしないということが求められるのである [Sen 1982, p. 12]。

この例からセンが導き出したのは、消極的自由の積極的含意であり、これはリバタリアンのいう消極的自由 (a) と対比して (b) のように表すことができる。

(a) Aには、Bによる干渉からの自由がある。

(b) Aには、Bによる干渉からの自由があるが、そのためにはCの助けを必要とする。

リバタリアンのいう消極的自由は、自由の侵害者と被侵害者の二者関係 (先の例では暴

漢とアリの関係、あるいはドナとチャールズの関係)しか考慮に入れないが、センのように「多面的な相互依存関係 (*multilateral interdependences*)」[Sen 1982, p. 6]を視野に入れば、各人の消極的自由(先ほどの例でいえばアリとチャールズの消極的自由)でさえも衝突することがある。従って、センによれば、消極的自由のためには何らかの積極的な働きかけが必要とされる場合があるのであり、「もしも私が消極的自由の保護のために、何ができるかについて考えることを拒否したならば、消極的自由を価値あるものにすることに失敗する」[Sen 1984, p. 314, 強調原文]。

また、センにとっては、消極的自由の保護のためには、他者の意図的な干渉からの自由のみを視野に入れるのは適切ではない。センはこうした見解に対して次のような問いを投げかける。

「人は、川に突き落とされた人のみを助ける義務を負い、川に落ちた人を助けるべきではないのだろうか? 飢えている人を助けるかどうか決める際に、食料を盗まれた(消極的自由を侵害された)人に対しては『イエス』といい、職を解雇されたり、高利貸しに土地を取られたり、洪水や干ばつで苦しんでいる(いかなる消極的自由の侵害されていない)人には『ノー』ということは許されるのか?」[Sen 1984, pp. 314~5, 強調原文]。

もちろん、こうしたセンのリバタリアン批判に対して、フィクションを使った議論で正当性はないと主張することはできるが、センは現実起こったより悲惨な例をあげる。貧困や飢饉の問題などの開発経済学についても長年にわたり研究してきたセンが、近年の飢饉に見出したのは、食料の生産量や入手可能性が高水準——しばしばピークに達しているときもあった——であるにもかかわらず、完全に正当とされる権利の行使により、適切な食料を得るための権原がシフトし、数百万の人々が犠牲になったという現実であり、この点からセンは次のように述べる。

「大規模な飢饉でさえ、誰のリバタリアンの権利(所有権も含めた)を侵害することなく起こり得る。[中略]これは『壊滅的な道徳的恐怖』の特殊な一例のように見えるかもしれない。しかし、どれ程の深刻さ——大規模な飢饉から通常の栄養失調や地方特有ではあっても極端でない飢えに至るまで——であろうとも、恐怖は誰のリバタリアンの権利も侵害されないシステムと両立可能である」[Sen 1999a, p. 66/73~74頁, 強調原文]。

ここで、注意を払わなければならないのは、誰のリバタリアンの権利の侵害も起こっていないという部分である。犠牲になった数百万の人々のリバタリアンの権利は決して侵害されてはおらず、消極的自由も保証されていたという事実、それにも関わらず、死を招くような重大な危機が起こったという事実は、特に強調されるべきである。

これらのことから、センは消極的自由のみを掲げるリバタリアニズムを批判し、積極的自由も含めたアプローチを提唱する³⁾。

2. 潜在能力と自由

前節で見たように、センは、リバタリアンのいう消極的自由の欠陥を指摘し、何らかの積極的自由が必要とされることを主張するのであるが、この積極的自由を捉えるために「潜在能力アプローチ (capability approach)」と呼ばれるアプローチを提唱する。

まずは、潜在能力と密接に関連する「機能 (functionings)」から見ていこう。センのいう「機能」とは、「人がなしうること、すなわち彼／彼女が行ないうる (to do) こと、なりうる (to be) こと」[Sen 1985, p. 7/22頁]であり、「適切な栄養を得ているか」、「良い健康状態か」、「避けられる病気や早すぎる死から免れているか」などの基本的なものから、「幸福であるか」、「自尊心を持っているか」、「地域社会の生活に参加しているか」などのより複雑なものまで様々であり、こうした「人が行なうことのできる様々な機能 (なること、すること) の組み合わせ」を表したものが潜在能力である。潜在能力は様々なタイプの生活を送る、ある人の「自由」を反映した機能のベクトルの集合として表される [Sen 1992, pp. 39~40/59~60頁]。

財空間における「予算集合 (budget set)」が、どのような財の組み合わせを購入できるかという個人の「自由」を表しているように⁴⁾、「機能空間における『潜在能力集合』は、可能な生活から選ぶ自由を表している」[Sen 1992, p. 40/60頁]。

ここでセンのいう自由とは人が価値ある生活を営むための積極的自由であり、こうした自由概念をもとに、先程の飢饉の例に戻れば、飢饉の犠牲になった人々は、確かにリバタリアンのいう消極的自由は侵害されていないが、積極的自由は重大な侵害を受けていることとなる。

しかし、このように積極的自由を捉える空間として潜在能力を提示しても、様々な問題は残されたままである。まずは、バーリンとセンの共通の友人で哲学や倫理学に多大な業績を残したバーナード・ウィリアムズの指摘した問題点を見ておこう。ウィリアムズの主張はこうである。私がある部屋を通り、一人の男が歌っているのを目撃したとする。彼は現実に歌っているため、彼は歌うことができる（「そうあること」は「できる」を示すというスコラ的な格言により）。しかし、後に、彼は気が狂っており、いつも歌っているということが分かったとしよう。このとき、彼が歌うということは、われわれが通常、歌うということに関連付ける潜在能力を表してはおらず、それはとりわけ歌わないという潜在能力と関係している。この点は「機能」に適用される。もしも実際に歌うことが機能を作るのに十分であるならば、もちろん、狂気の男が歌うことは、その一例となる。この前提に立つならば、われわれは、機能が、必ず実質的または関連した潜在能力を示すというべきではないであろう [Williams 1987, p. 97]。

このようなウィリアムズの指摘に対して、センは必ずしも反対のことをなす能力が必要

とされるわけではない点をあげて⁵⁾、混乱を避けるために「洗練された機能 (refined functionings)」という考えを提唱する。機能を洗練するために重要なのは、他の選択肢が与えられた「反事実的 (counterfactual)」な機会に注目することであり、例えば、何らかの理由 (政治的、宗教的) で人が断食をするというのは、ただ飢えることではなく、食べることは可能であっても食べるという選択肢を拒否することであると見なされる。この洗練された機能の観点から見れば、ウィリアムズが例としてあげた先程の狂気の男は他の選択肢がある中で歌うという選択を行なったのではないために、実際には歌うという機能を持ってはいないこととなる [Sen 1987, p. 111]。

次に、以下の二つの問題について見ておこう。

- (1) 人の機能は決して一つではないために、機能の組み合わせの選択にあたっては、各機能にどれ程の重きを置くかなどの、何らかの評価作業が必要とされるという問題。
- (2) センが実際には、潜在能力の具体的なリストを提示していないために、何が潜在能力とみなされるべきか不明確である。

これらの問題点に関して、センは、この各機能のウェイト付けに関しては、完全な解決法を提示せず、また潜在能力のリストをあげることもしない。

(1) についてセンは、評価作業の重要性を否定しないが、「完備性 (completeness)」を追い求めて完備性が得られるまでは何もしない、という誤った考えは退ける。

「『完備性の要求』が猛威をふるったため、経済予測の他の問題 (例えば個人間比較や実質所得の指数化) において悲惨な結果が生まれてきた。すなわち、我々に、沈黙かたわ言かという誤った選択を課してきたのである。[中略] 多くの経済的・社会的関係は、部分的で不完全であることを認識することが重要である」 [Sen 1985, pp. 20~1 / 47 頁]。

潜在能力アプローチを用いるには「完備順序」は必要ではなく、「部分的な順序づけ (partial orderings)」でも十分であることを確信するセンの主張にも明白な根拠がある。

「いずれの機能や潜在能力についても、より多くのものを享受していればそれは明らかな改善であり、これはそれぞれの機能や潜在能力に対して与えられるそれぞれのウェイトに関して合意が成立していなくとも決められる」 [Sen 1992, p. 46 / 66 頁、強調原文]。

ここでも例をあげて考えてみよう。機能 x と機能 y の二つが与えられたとする。この二つの機能は、一般的にはどちらが優越しているか決定できない、あるいは社会の中で合意がないかもしれない。しかし、その場合であっても、 (x, y) というペアよりも $(100x, 10y)$ あるいは $(10x, 100y)$ というペアの方が優越しているのは確かである (後の二つのペアについては未決定であっても)。

それ故に、センは、こうした部分的な順序付け、部分的な社会的合意であっても、誰の目にも明らかな著しい不正義や不公正という基本的問題についての有効な合意は得られる

のであり、その他の評価作業については、開かれた公共的討議などとの兼ね合いで行なわれるべきであるとする [Sen 1999a, pp. 253～4 / 290～291頁]。

(2) もこの点に関連しており、センは、潜在能力のリストを提示しない理由を次のように説明している。

「固定化された潜在能力の永遠に妥当なリストについて主張することは、社会理解の進歩の可能性を否定し、公共的討議や社会運動、そして開かれた議論の生産的な役割に目をつぶることになりかねない」 [Sen 2005, p. 337]。

3. センとバーリンの自由概念

前章でセンの自由概念を検討したが、本章ではセンのバーリン解釈に目を向けてみたい。センによれば、バーリンの消極的自由は、リバタリアンのいう消極的自由と決して同一のものではなく、より広い含意を持ったものであり、バーリンが「人が、あるいは人々が、欲するがままの生き方を選択する自由」 [Berlin 2002, p. 215 / 387頁] ということで意味している自由とは、単に他者の干渉から免れていることではなく、「個人が望む生き方を選択する能力」のことである。従って、もしも人々が空腹やマラリアのない生活を望むならば、これらの害悪を公共政策で取り除くことは「人々が望む生き方を選択する自由」を高めることとなる [Sen 1992, p. 67 / 99～100頁]。この点からセンは、バーリンの消極的自由においては、労働市場の不十分な需要から発生した飢えや飢饉は消極的自由の侵害と見なされると主張する [Sen 2002, p. 509]。

こうしたセンのバーリン解釈は、センのアプローチと親近性があるのは事実である。しかし、この解釈は、バーリン自身の見解とは決定的に異なっているといわざるをえない。以下、この点を見ていくこととする。確かにバーリンは、積極的自由そのものを否定するわけではなく、消極的自由が「自由放任」と混同され害悪を撒き散らしたことも否定しない。しかし、「飢えたものに食料を与え、裸の者に衣服を着せ、家のない者に住居を与え、他人の自由に余地を残し、正義や公正が行なわれるようにするためには、自由を削減しなければならない」 [Berlin 1988, pp. 10～1 / 18頁] と述べているように、何らかの施策が必要とされることは認めつつも、それは、決して自由を増す（センの主張はこちらである）ものではなく、逆に自由を削減するものであるとする。すなわち、バーリンにとっては、消極的自由のよく見られる例、両親や先生が子供の教育を決定する自由、雇用者が労働者を搾取する自由、奴隷所有者が奴隷を自由に処分する自由なども、品位ある社会においては、必ず削減、ないし廃止すべきものであるが、だからといってこれらが真の自由であることにはかわりはない。これらを除去することは必要であるにもかかわらずそれは決して自由を増すものではないのである [Berlin 2002, pp. 48～9 / 86頁]。

また、センは飢えや飢饉もバーリンの消極的自由の侵害であるという見方をするが、バーリン自身は、消極的自由があくまで政治的自由であることを強調し、貧しくて食料を得ることができないというのは、経済的な自由の侵害ではあっても政治的な消極的自由の侵害ではないとする [Berlin 2002, p. 169 / 308頁]。

このようにバーリンは、センとは違い、政治的自由としての消極的自由が他の価値や消極的自由を行使するための条件と混同されることを拒否するのであるが、なぜこのような区別を固持するのか。バーリンの主張はこうである。

「消極的自由も、活発に行使するための十分な条件がなければ、[中略] ほとんど価値がないという真理にとりつかれている人々は、その重要性を矮小化しがちであり、自由という名さえそれから剥奪して、一層重要であると考えているものにその名を与え、ついには、社会的にも、個人的にも、それなくしては人間生活がしぼんでしまうということさえ忘れてしまいがちである」 [Berlin 2002, p. 50 / 89～90頁]。

もちろん、私は、このバーリンの主張をセンの自由概念に当てはめるつもりはない。またセンとバーリンの自由概念の優劣について論じるつもりもない。ただ両者の自由概念は異なったものであることを指摘したいだけである。

それでは、なぜこの二人は異なった自由概念を提唱したのか。結論でこの問題について考え、本論を閉じるとしたい。

むすび

これまで見てきたように、センは、リバタリアンの掲げる消極的自由を批判し、積極的自由を含めたアプローチを提唱する。そして、バーリンの消極的自由もセンのアプローチとの親近性を持っていると解釈するのであるが、センの解釈するバーリンの自由概念は、バーリン自身のものとは決定的に異なるものである。それでは、なぜこの二人は異なる自由概念を提唱したのか。結論においてこの問題を考えてみたい。

ところで、ヴィーコやヘルダーの思想に大きな影響を受けたバーリンが、長年にわたり主張した見解に、思想家やその思想家の提唱した概念を扱うには、歴史的文脈を無視してはならず、歴史的文脈の中で検討しなければならない、というものがある。このバーリンの見解に従い、センとバーリンが自由概念を構築した歴史的な文脈を明らかにし、ここに二人の自由概念の違いの根拠を求めてみたい。

まずは、センから見ていこう。インド出身のセンが9歳の頃に目撃した心に残る出来事として述べているのは、後年センが研究し、300万人にも及ぶ死者を出したことが判明したベンガル飢饉であり、この飢饉についてセンは、「今となっては信じられないぐらいむごたらしい苦しい体験であり、[中略] 力なく物乞いをし、ひどく苦しみ、静かに死んでい

く何千何万の人々の光景を忘れることができない」[Sen 1990, p. 49/69頁]と述べている。このようにセンが向き合ったのは、最低限の自由さえも享受できない人々がおり、何らかの助けを必要としているという「現実」である。従って、哲学者のイアン・ハッキングがセンの著作に「同胞愛」を読み取ったのは間違いではない[Hacking 1996]。

一方、バーリンの場合は、後年バーリン自身が、「二つの自由概念」は決して、中立的な概念分析ではなく、反マルクス主義の政治的意図があったことを認めているように[Berlin 1998, pp. 93~4]、当時まだその恐怖が現実のものであった全体主義（バーリンは8歳の頃に二つのロシア革命を、第二次大戦後にはソ連を訪れその惨状を目にしている）に対抗する意図を持ったものであり、バーリンの向き合った現実とは、歪められた積極的自由が、「自由」の名のもとに、人々を抑圧する状況である。それ故、バーリンの友人であったチャールズ・テイラーが、全体主義イデオロギーを根絶しようとする「マジノ線メンタリティー」を読み取ったのは間違いではない[Taylor 1979]。

このように、向き合った現実が異なるセンとバーリンは、それぞれ追求した自由概念も異なっている。消極的自由の侵害はなくとも飢饉などによって犠牲になった数多の人々の声なき声に耳を傾けたセンは、従来の自由概念の欠陥に気づき、代わって自由概念を拡張させるアプローチを提唱した。これに対して、全体主義イデオロギーの中に自由概念の歪曲を見たバーリンは、それまで英米系の哲学者には軽視されがちであった思想史という分野に足を踏み入れ、自由概念を掘り下げることで歪曲の根を探り当てる作業を行なった。

しかし、この違いについて述べたからといって、しっかり現実と向き合っただけで自由について考察する姿勢を重視した二人の共通点を見逃すわけではない。よって、センとバーリンを比較することから導き出される私の結論はこうである。自由という概念を考察するに際して、抽象的な論理の世界で悪戯に言葉をこねくり回すだけでは何ら有効な自由の概念は生まれない。こうした議論は知的趣味を満足させることはあっても社会を批判し、改善する有効な武器とはなりえない。有効な自由の概念とは、向き合った現実との批判的対決を通して構築されるものである。

注

- 1) 政治理論の領域においても多大な貢献をなしながら、その著作活動のほとんどは思想史に関連する分野に向けられていたバーリンと、1998年度のノーベル経済学賞を受賞する程の一流の経済学者センは、一見、まったく異なった領域を専門とするように見える。しかし、実はバーリンとセンの知的交流は長い。例えば、バーリンは自身のオーギュスト・コント記念講義「歴史の必然性」(1953)に向けられた当時20代の若きセンの批判を検討し、それに答えている[Berlin 2002, pp. 7~10/15~19頁]。またセンも有名な「合理的な愚か者」という講演論文に関して、後年、この講演はバーリンの招きによって行なわれ、講演原稿も大部分がバーリンのことを念頭に置いて書かれたものであると述べており[Sen 1999b, p. 5/7頁]、バーリン死後には、自由の観念についての長年にわたる寛大な批判について想起する弔辞を述べている[Sen 1999a, p. 349, n. 1/353頁、(注1)]。
- 2) この解釈の例としては[Macpherson 1973, pp. 97~104/162~174頁]を参照。

- 3) このように積極的自由に焦点を合わせることは、消極的自由を排除するものではなく、センは、出版の自由や政治的野党の存在が許されているなどの消極的自由は、食料不足や恐ろしい飢饉に関連した避けられる病気、死を免れるという積極的自由に貢献するとしている [Sen 1988, pp. 285～6]。センはそもそも消極的自由と積極的自由は相互に関連したものであり、完全に分離したものとして考えるのは適切でないとするのである。
- 4) 「予算集合」に対するセンの説明はこうである。「予算集合はこの空間〔財空間〕における人の自由の程度、すなわち様々な財の組み合わせの消費を達成する自由の範囲を表している」 [Sen 1992, p. 36/52頁]。例えば、それぞれAが10000円、Bが1000円を持って二人で同じコンビニに行く場合には、Aの方が選択できる財の組み合わせの集合は多く、自由の範囲は広い。しかし、財空間ではなく、機能空間に着目すればAが10000円、Bが1000円を持ってコンビニに行く場合でも、必ずしもAの方が自由であるとは限らない。例えば、基本的な栄養を満たすという基本的な機能でもAは代謝率が高く、多くの食料を必要とする、従って多くの財貨を必要とする可能性もある。
- 5) センは、次のような例をあげてこの点を説明している。アンは、彼女がそう選択するならば、ビル的心思とは関係なく、ビルと結婚しない能力を持っているかもしれない。しかし、このことは彼女がそう選択するならば、ビル的心思とは関係なく、ビルと結婚する能力（すなわち、ビルと結婚しないことをしない）を持っていることを示すわけではない [Sen 1987, p. 111]。

参考文献

- Berlin, I. (1988) "The Pursuit of the Ideal", in *Proper Study of Mankind: An Anthology of Essays* (edited by H. Hardy and R. Hausheer, Farra, Straus and Giroux, 2000), pp. 1～17. / 河合秀和訳「理想の追求」、『理想の追求 パーリン選集4』（福田歓一他訳、岩波書店、1992年）、1～28頁。
- (1998) "In Conversation with Steven Lukes", *Salmagundi*, No. 120 (Fall 1998), pp. 52～134.
- (2002) *Liberty* (edited by H. Hardy, Oxford University Press, 2002). / 小川晃一・小池 鈺・福田歓一・生松敬三訳『自由論』（抄訳）みすず書房、1971年。
- Hacking, I. (1996) "In Pursuit of Fairness", *The New York Review of Books*, September 19, pp. 40～3.
- Macpherson, C. B. (1973) "Berlin's Division of Liberty", in *Democratic Theory: Essays in Retrieval*, Oxford: Clarendon Press, 1973, pp. 95～119. / 西尾敬義・藤本博訳「パーリンによる自由の分割」、田口富久治監修『民主主義理論』青木書店、1978年、159～199頁。
- Sen, A. K. (1982) "Rights and Agency", *Philosophy and Public Affairs*, vol. 11, pp. 3～39.
- (1984) *Resources, Values and Development*, Basil Blackwell.
- (1985) *Commodities and Capabilities* (republished Oxford University Press, 1999). / 鈴木興太郎訳『福祉の経済学——財と潜在能力』岩波書店、1988年。
- (1987) "Reply", in *The Standard of Living* (edited by G. Hawthorn, Cambridge University Press), pp. 103～12.
- (1988) "Freedom of Choice: Concept and Content", *European Economic Review*, vol. 32, pp. 269～94.
- (1990) "Individual Freedom as a Social Commitment", *The New York Review of Books*, June 14, pp. 49～54. / 川本隆史訳「社会的コミットメントとしての個人の自由」、『みすず』1991年1月号、68～87頁。
- (1992) *Inequality Reexamined*, Harvard University Press. / 池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳『不平等の再検討——潜在能力と自由』岩波書店、1999年。
- (1999a) *Development as Freedom*, Anchor Books. / 石塚雅彦訳『自由と経済開発』日本経済新聞社、2000年。
- (1999b) *Reason Before Identity*, Oxford University Press. / 細見和志訳『アイデンティティに先行する理性』関西学院大学出版会、2003年。
- (2002) *Rationality and Freedom*, The Belknap Press of Harvard University Press.
- (2005) "Capabilities, Lists, and Public Reason: Continuing the Conversation", in *Amartya Sen's*

- Work and Ideas: A Gender Perspective* (edited by B. Agarwal, J. Humphries and I. Robeyns, Routledge, 2005), pp. 335 ~ 8.
- Taylor, C. (1979) "What's Wrong with Negative Liberty", in *Human Agency and Language: Philosophical Papers 1*, Cambridge University Press, 1985, pp. 211 ~ 29.
- Williams, B. (1987) "The Standard of Living: Interests and Capabilities", in *The Standard of Living*, pp. 94 ~ 102.